

ポーランドの アイヌ研究者 ピウスツキの仕事

—白老における記念碑除幕に寄せて—



ブロニスワフ・ピウスツキの記念碑が 白老のアイヌ民族博物館で除幕

井上 紘一

ポーランド共和国文化・国民遺産省はこのほど、ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)のブロンズ胸像を白老のアイヌ民族博物館へ寄贈します。彼の最初の記念碑は1991年11月2日にユジノ・サハリンスクのサハリン州郷土誌博物館に建立されており、白老の記念碑は世界で二番目の壮挙です。贈呈・除幕式は、来る10月19日に白老のアイヌ民族博物館で、ポーランドのB.ズドロイエフスキ文化・国民遺産相やC.コザチェフスキ駐日ポーランド大使らが列席して挙行され、ピウスツキ家からも三人の「孫」(ブロニスワフの孫でピウスツキ家嫡嗣の木村和保氏、実弟ユゼフの孫でユゼフ・ピウスツキ博物館長のクシシュトフ・ヤラチェフスキ氏、末妹ルドヴィカの孫でブロニスワフの伝記研究にも携わる作家のヴィトルト・コヴァルスキ氏)が出席する予定です。

翌20日には北大の学术交流会館で、市民を対象とする記念セミナーが開催されますので、関心を共有される皆さまは奮ってご参加ください。

ブロニスワフ・ピウスツキは、ロシア帝国に併合されていたリトワニアでポーランド貴族の家系に生まれた卓越する文化人類学者です。サンクト・ペテルブルグ帝大法科一年生だった1887年、ロシア皇帝暗殺未遂事件に連座してサハリン島へ流刑となり、19年をロシア領極東で過ごしました。その間、北東アジア原住民研究に従事し、この分野では先駆的な研究成果を残しましたが、1906年のヨーロッパ帰還後も不遇で、膨大な成果の整理・公刊を果たすことなく、第一次世界大戦下のパリで客死します。年子の実弟ユゼフ(後のポーランド共和国初代元帥、国家首席)が亡国ポーランドを再興する半年前のことでした。

ピウスツキ没後ほぼ1世紀が経過し、特に1970年代以降は、彼の生涯や仕事の掘り起こし作業がポーランド、ロシア、日本などで進められ、ピウスツキは今や北東アジア原住民研究の魁(さきがけ)として、揺るぎない地位を占めています。

彼の仕事では、1912年に刊行された著書『アイ

ヌの言語・フォークロア研究資料』(クラクフ)が名著として名高く、アイヌのほかにニヴフ(ギリヤーク)、ウイльта(オロッコ)、ウリチ(オルチャ)、ナーナイ(ゴリド)の言語・フォークロア研究にも、当時の最新機器の蠟管蓄音機やカメラを駆使して携わり、先駆的成果を残しています。これら既刊・未刊の研究業績は、1998年から刊行がはじまったA.F.マイエヴィチ編『ブロニスワフ・ピウスツキ著作集』(全5巻、4巻まで既刊)にすべて収録される予定です。

ピウスツキの学術遺産に新たな光が当てられるきっかけは、1979年春の札幌におけるCRAP(ピウスツキ業績復元評価委員会。のちにICRAP)の発足でした。ICRAPは、ポーランドで発見されたピウスツキ採録の録音蠟管を日本へ借り出し、最先端の科学技術を駆使して音声再生作業を進めるとともに、散逸した研究業績を博搜して然るべく評価し、彼の伝記資料も収集しました。

その成果は1985年に札幌で行われた第1回ピウスツキ国際シンポジウムで報告されました。その後1991年には第2回シンポジウムがサハリンのユジノ・サハリンスク、第3回は1999年にポーランドのクラクフ、ザコパネと、いずれもピウスツキ縁(ゆかり)の地で開催されました。2010年には澤田和彦・井上紘一編『ブロニスワフ・ピウスツキ評伝』(全2巻、埼玉大学教養学部刊)が上梓されました。

日本はブロニスワフ・ピウスツキと浅からぬ縁で結ばれています。彼は1902-1906年にかけて4度訪日しました。特に1903年の第2回来日は北海道に3ヵ月、1906年の第4回では東京と長崎を中心に7ヵ月半と、かなり長く滞在しました。

北海道では、ポーランド人シェロシェフスキの北海道アイヌ調査に専門家として参加し、函館と白老に各1ヵ月、平取に1週間余り、札幌に数日間滞在しました。とりわけ白老ではアイヌ・コタンに住みつき、コタンの人たちと胸襟を開いて付き合ったことが知られています。

ヨーロッパへ戻る途上の第4回来日では、政治家・文学者・アイヌ研究者・社会主義者・女権活動

家・女流音楽家など多士済々の日本人のみならず、亡命ロシア人や中国人革命家とも交際を重ねた事実もわかっています。なかでも二葉亭四迷との厚い友情は特筆に値します。ピウスツキのアイヌ研究処女作「樺太アイヌの状態」は、東京の京華日報社が発行する月刊誌(『世界』26、27号、1906)に日本語訳で発表されています。

ブロニスワフ・ピウスツキは1903年9月、南樺太東海岸のアイ・コタンでアイヌ女性チュフサンマと結婚し、助造・キヨの二児をもうけました。彼のヨーロッパ帰還後も、妻子は樺太に留まりました。遺児は太平洋戦争後に北海道へ移住し、兄は富良野町、妹は大樹町で一家を構えました。今は孫や曾孫の世代ですが、ブロニスワフの末裔は全員が日本人として日本に住んでいます。因みに、長男助造の長男である木村和保氏は、当代ピウスツキ家の正統な当主ですが、1999年のポーランド初訪問を機に、ユゼフの孫娘一家と

は家族ぐるみで往来を重ねています。

今般のピウスツキ顕彰事業の発端は、ポーランド大使館が着想されたピウスツキ記念碑の寄贈計画でした。2010年8月には当時のヤドヴィガ・ロドヴィッチ大使の発案で記念碑寄贈と学術集会を推進する実行委員会が発足しました。実行委員各位には「縁の下の力持ち」を務めていただきましたが、この場を借りて厚く御礼申し上げます。顕彰事業の実現に至る3年間には、多方面の方々からご支援・ご鞭撻をいただきました。とりわけ事業資金の提供を賜るポーランドの文化・国民遺産省、ポーランド大使館、ポーランド広報文化センター、グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」、そして記念セミナーを主催して下さる北海道ポーランド文化協会と北大スラブ研究センターには、特段の深謝をここに銘記する次第です。

(いのうえ・こういち、2013年9月20日記)

記念「国際セミナー」へのお誘い

日時 2013年10月20日(日)9時～17時

会場 北海道大学学術交流会館2F講堂(札幌市北区北8西5)

挨拶 ツィリル・コザチェフスキ(駐日ポーランド大使)
クシシュトフ・ヤラチェフスキ(ユゼフ・ピウスツキ博物館長、ユゼフ・ピウスツキの孫)
木村和保(ピウスツキの孫)

第1部 講演 9:30-13:00 (日本語通訳付き)

E.パワシュェルトコフスカ ◆ ブロニスワフ・ピウスツキのポーランドと日本
(ワルシャワ大学教授)

W.コヴァルスキ ◆ 地球人の魁 ブロニスワフ・ピウスツキとは何者だったのか
(文筆家、ピウスツキの妹の孫)

A.F.マイェヴィチ ◆ なぜだろうか: 白老でブロニスワフ・ピウスツキの記念碑が除幕されるわけ
(アダム・ミツキェヴィチ大学教授、コペルニクス大学教授)

第2部 合同セミナー 14:00-17:00 (日本語)

井上紘一(北海道大学名誉教授) ◆ 「ブロニスワフ・ピウスツキ年譜」より

朝倉利光(北海道大学名誉教授、前北海学園大学長) ◆ 古蠟管レコード資料からの音声再生

村崎恭子(元北海道大学言語文化部教授) ◆ 樺太アイヌ語研究におけるB.ピウスツキ蠟管再生の功績

山岸 嵩(前日本工業大学教授、元NHKチーフディレクター) ◆ よみがえったモノとコト、よみがえらせた物と者

※ 記念碑除幕式(10/19 アイヌ民族博物館・白老)については佐光までお問い合わせください。

主催 北海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター

共催 グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」

協力 駐日ポーランド大使館、ポーランド広報文化センター

お問い合わせ先 Tel: 011-790-8610 e-mail: ssamitsu@hotmail.com(佐光)





写真 1a (左から) 安藤会長、コザチェフスキ駐日大使、小林監査委員、氏間運営委員

ポーランドの アイヌ研究者 ピウスツキ 記念

昨年10月19～20日に、ブロンスワフ・ピウスツキ顕彰事業(胸像除幕式と記念セミナー)が実施されました。北海道ポーランド文化協会には、20日の記念セミナー主催者の一翼を担っていただき、また多くの会員の方々の御支援を賜りました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

白老のアイヌ民族博物館で19日に举行されたブロンズ胸像除幕式=写真1a=には、寄贈主のポーランド側からB.ズドロイェフスキ文化・国家遺産相、C.コザチェフスキ大使、J.ロドヴィッチ=チェホフスカ前大使、M.ウーチュコ・ポーランド広報文化センター長、ピウスツキ家からは3人の孫(木村和保氏、作家のW.コヴァルスキ氏、ユゼフ・ピウスツキ博物館長のK.ヤラチェフスキ氏)が列席されました。

20日の記念セミナー=写真2a=では、200名を超す人々が北大の学術交流会館に参集されました。

ブロンスワフ・ピウスツキ=写真1b=は1903年夏の第2回来道の際、白老に1ヵ月ほど滞在しアイヌの人たちと胸襟を開いて交流しましたが、地元の白老ではその記憶がまったく伝承されていません。そこで今回の記念碑建立が、ピウスツキと白老の絆の新たな出発点となることが期待されます。

1980年代前半の日本では「ピウスツキの蠟管」が当時の最先端技術を駆使して「90年ぶりに再生」され、全国的な話題になりました。この「蠟管ブーム」の最大の功労者は、音声再生を実現した科学技術の粋(これについては朝倉利光氏=写真2b=に報告していただきました)もさることながら、むしろ再生過程とその周辺を記録して全国津々浦々の茶の間に届けたテレビ報道だったでしょう。セミナーでは、ブームの火付け役となり、2本の関連番組を製作された山岸嵩氏(元NHKチーフディレクター)=写真2b=に取材の裏話を披瀝してもらい、端なくも、日本におけるピウスツキ研究の生成過程を跡づけていただくことになりました。

「蠟管」プロジェクトの終幕として、1985年9月には「ピウスツキ古蠟管とアイヌ文化」と銘打つ国際シンポジウムが、今回の記念セミナーと同じ北大学術交流会館に内外の研究者148名を結集して開催されました。同シンポジウムは、アイヌ文化を謳った大型国際集会としては世界初の試みでした。ピウスツキにかかわる国際集会はその後も継承され、1991年の第2回は「ソ連」のユジノ・サハリンスク、1999年の第3回はポーランドの古都クラクフ、ザコパネと、ピウスツキゆかりの町を巡回しました。爾来15年が経過し、近



写真 1b ポーランド政府から白老町「アイヌ民族博物館」に寄贈された胸像。台座にはポーランド語、日本語、アイヌ語、英語で次の銘が刻まれている。

ブロンスワフ・ピウスツキ
1866-1918
ポーランド流刑者、卓越せる民族学者
アイヌと極東先住民研究の開拓者
1903年8月
当地白老に滞在、研究に勤しんだ

の胸像除幕式と セミナー

い将来には第 4 回集会在世界のどこかで催されることが強く囑望されます。今般の事業は市民を対象とする記念セミナーという形式でしたが、そのような国際的ピウスツキ研究の一端を担うものとして位置づけられます。

日本におけるピウスツキ研究の第 1 世代は軒並みに高齢化して、すでに鬼籍に入られた方も少なくありません。第 1 世代の掲げた篝火が第 2、第 3 世代によって首尾よく引き継がれるよう願ってやみません。その意味では、今回の事業が若い人々の関心を些かなりとも喚起できたとすれば、まことに喜ばしい限りです。

ポーランドの映像作家ワルデマル・チェホフスキ氏＝写真3＝(ロドヴィッチ＝チェホフスカ前大使の夫君)は除幕式の前々日に白老に入り、式の前日から記念セミナーの翌々日まで事業の一部始終を映像に収めて帰国されました。記録映像の一部はインターネットで公開されています。氏はピウスツキ没後百年に向けてその生涯の追跡調査に挑み、その事績を掘り起こして映像化する構想を温めておられます。この記録映画製作のため、同氏は国際交流基金の研究助成に応募されたので、数年後には飛びきり斬新な視聴覚情報によるピウスツキ評伝に接することができそうです。氏の初志貫徹を心から願う次第です。

北海道ポーランド文化協会には記念冊子『ピウスツキの仕事』＝写真 4＝の編集もしていただき、除幕式と記念セミナーの参加者に配布することができました。同冊子はその後、増補修正版が北大ホームページの HUSCAP にも収録されています。より包括的で、より正確な情報を希望される方は、どうか HUSCAP 版もご参照ください。

井上 紘一

2014 年 2 月 23 日、札幌にて

『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事：
白老における記念碑の序幕に寄せて』(HUSCAP 版)
WEB 検索:「ピウスツキの仕事」

<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/journals/index.php>

※冊子をご希望の方は事務局(1ページ目左上参照)にお問い合わせください。



写真 2a 記念セミナー会場風景



写真 2b 第 2 部のセミナー講師 (左から) 井上紘一、朝倉利光、村崎恭子、山岸 嵩の各氏



写真 3 銅像建立式典の安全祈願「カムイノミ」を取材するチェホフスキ監督 (前列一番手前)。その映像はこちらから ↓ ご覧になれます。YouTube 《 polski pomnik na Hokkaido 》
<http://www.youtube.com/watch?v=apYUmJl2EfU&feature=youtu.be>

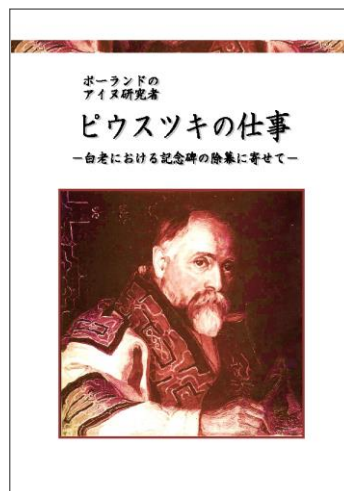


写真 4 記念冊子『ピウスツキの仕事』A4判142頁

写真・尾形 芳秀